

# 令和6年度 企画展示

## 「公文書館資料にみる女子教育のあゆみ」

### 展示目録

令和7(2025)年1月24日(金)から3月30日(日)まで

神奈川県立公文書館1階展示室

番号	資料名	内容等	年代	資料ID等
<b>第1章 江戸時代～明治初期 村の女子教育</b>				
1-1	【相模国津久井県沢井村石井達也家文書】 女大学	江戸時代中期から明治時代に普及した、女子教訓書です。貝原益軒『和俗童子訓』中の「女子を教ゆるの法」から抜粋・編集されています。 内容は、結婚後の女性の心得として、夫に従い、舅・姑に仕えるべき事が書かれています。	(江戸期)	沢井村 石井達也家文書 2200716634
1-2	(女今川)	南北朝時代の武将 今川了俊が残した家訓書「今川状」になぞらえて、女性が日頃守るべき事を書き上げたものです。 『女大学』とともに女子教育に用いられ、主に手習いの教科書として使用されました。	(江戸期)	出所不明 版本類 2201706029
1-3	【横須賀市秋谷奈良谷氏寄贈資料】 〔下等小学第八級卒業証書〕	秋谷村（現在の横須賀市秋谷）秋谷学校の下等小学第8級の修了証書です。この当時、小学校は上等と下等に分かれ、下等第8級は現在の小学1年生の前半にあたります。証書もらったセツは年齢が11歳11ヶ月となっていますが、これは秋谷学校が設立され通い始めた際の年齢ではないかと推測します。しかし、秋谷学校の設立年が不明のため詳らかではありません。	明治9年 (1876)	奈良谷氏 寄贈資料 2201200433
1-4	【横須賀市秋谷奈良谷氏寄贈資料】 証（小学初等第二級卒業につき）	秋谷学校小学初等第2級の修了証書です。この当時の小学校は初等科と中等科に分かれており（一部高等科もあり）、それぞれ3学年ずつとなっていました。 初等2級となっていますが、初等科は下から1年・2年・3年となっているため、級の呼称はありません。旧制度の名残なのか、秋谷学校独自のものなのかは不明です。	明治15年 (1882)	同上 2201200435
1-5	【横須賀市秋谷奈良谷氏寄贈資料】 小学読本 卷之三	下等小学第6級の「読物」の教科書です。下等小学第6級は現在の小学2年生の前半にあたり、「読物」は現在の「国語」に相当します。 明治6年の神奈川県「下等小学教則」第6級の項に「一、読物 小学読本卷ノ三及ヒ地理初歩ヲ授ケ、兼テ地球儀ヲ示ス」とあり、教科書として使われていたことが分かります。	明治7年 (1874)	同上 2201200436
1-6	【横須賀市秋谷奈良谷氏寄贈資料】 地理初歩	『小学読本 卷ノ三』と同じく下等小学第6級の「読物」の教科書です。 学年が上がるにつれて「日本地誌略」、「日本史略」も教科書として使用されるため、「読物」の授業が地理・歴史の授業も兼ねていた事が分かります。	明治10年 (1877)	同上 2201200405
1-7	【横須賀市秋谷奈良谷氏寄贈資料】 初等小学修身初歩 卷の二	「修身」の授業の教科書です。「修身」は現在の「道徳」の授業に相当します。 当初の「修身」教科書は、欧米の近代市民道徳の書籍の翻訳が使われていましたが、明治23年の「教育勅語」以降は忠君愛国の内容に変化していきます。	明治14年 (1881)	同上 2201200444
1-8	【中島秀雄氏寄贈文書】 神奈川県小学生徒心得	明治9年改正の「神奈川県小学定則」にある「小学生徒心得」を抜粋して印刷したものです。生徒一人一人に配られたものと思われます。 内容は、早起きの励行、朝の挨拶、10分前登校、授業中のよそ見・おしゃべりの禁止など、今に通じるものもあります。	明治12年 (1879)	中島秀雄氏 寄贈文書 2200431683

番号	資料名	内容等	年代	資料ID等
<b>第2章 公立高等女学校の創立とその様子</b>				
2-1	[神奈川県(立)高等女学校] 創立百周年記念誌 (県立横浜平沼高等学校編) 学校百年のあゆみ	明治34(1901)年5月、校舎の一部はまだ未完成のまま、新築校舎にて神奈川県立高等女学校が開校します。これが最初の県立女学校になります。のちに県立女学校が増えてきたため、昭和5(1930)年に県立横浜第一高等女学校と改称しました。	平成12年 (2000)	K372-1.31- 2-2000-1a
2-2	神奈川県告示第80号 神奈川県立高等女学校規則 (明治34(1901)年4月13日 神奈川県公報号外)	県立高等女学校は本科(4年制)、補習科(1年制)、技芸専修科(2年制)があり、本科と技芸専修科は小学校を卒業した満12歳以上、補習科は本科を修了した者に入学資格がありました。特に技芸専修科の学科の約70%が裁縫にあてられ、女子に重要な技術とされていました。	明治34年 (1901)	5190100039
2-3	[横須賀町豊島町組合立横須賀高等女学校] 創立90周年記念誌 (現・県立横須賀大津高等学校)	明治39(1906)年、横須賀町・豊島町組合立横須賀高等女学校が設立されました。当時の公立学校は、複数の町村が合同で設置するものもありました。	平成8年 (1996)	J000-0000- 5521
2-4	[愛甲郡立女子実業補習学校] 常盤：創立70周年記念誌 (のち県立厚木東高等学校、現・厚木王子高等学校)	明治39年、個人宅を校舎として、愛甲郡立女子実業補習学校が設置されました。当時の公立には郡立というものもありました。実業補習学校は、当時の義務教育(尋常小学校・4年制)を修了したあと、高等小学校や中学校、高等女学校へ進学せず勤労従事者となった青少年に実業教育を施す学校です。	昭和51年 (1976)	K372-9.2- 0005
2-5	[小田原町立小田原高等女学校] 神奈川県彙報 「小田原女学校開校式」 (のち県立小田原城内高等学校、現・小田原高等学校)	明治40年10月28日、町立小田原女学校が開校式を迎えました。県の彙報には、国勢の伸長にともない社会状況も変わり、地域社会の関わり方も複雑な形となってきたことが記されます。これに際し、その役割を全うするため、女子にも相応の教育が必要なのだと述べられています。	明治40年 (1907)	5190700104
2-6	[組合立鳩川実科高等女学校] 光陰 創立80周年記念誌 (現・県立上溝高等学校)	明治44(1911)年設立の高座郡溝村ほか2ヵ村組合立鳩川農業学校を前身として、大正5(1916)年に鳩川実業学校女子部、同12年溝村ほか3ヵ村組合立鳩川実科高等女学校として開校しました。実科高等女学校とは、家事・裁縫の実用的教科を主とした学校です。	平成3年 (1991)	K372-5.4- 0013
2-7	[逗子町立逗子実科高等女学校] 50周年記念誌 (現・県立逗子高等学校)	大正11(1922)年、逗子町立逗子実科高等女学校が開校します。当初の生徒数は50数名だったそうです。小規模ながら新築された校舎でしたが、翌年の関東大震災で全壊してしまいました。その後逗子幼稚園の一部を仮校舎としつつ、同14年新校舎が落成します。昭和18(1943)年に横須賀市立逗子高等女学校に改称します。	昭和47年 (1972)	K372-3.2- 0001
2-8	[秦野町立実科高等女学校] 創立七十周年記念誌(のち県立大秦野高等学校、現・秦野総合高等学校)	大正15(1926)年、秦野町立実科高等女学校が町立曾屋尋常高等小学校内にて開校しました。昭和6(1931)年に町立秦野高等女学校、同15年に神奈川県立秦野高等女学校と変遷します。	平成7年 (1995)	K372-6.3- 0004
2-9	[私立伊勢原実科女学校] 史：創立50周年記念誌 (現・県立伊勢原高等学校)	昭和3(1928)年、私立伊勢原実科女学校が開校、校舎がなかったため伊勢原町の大福寺本堂内を教室として借りていました。翌年伊勢原町立となり新校舎が建てられました。戦時中は相川村や城島村と組合立の女学校となりました。	昭和53年 (1978)	K372-6.4- 0002
2-10	【戦前期社会教育関係資料】神奈川県下処女会修養系統案 附処女会指導上ノ注意(女子青年会参考書類から)	女子教育は13歳以上の未就学者で、未婚者を対象に女子青年団を組織しても行われた。これを処女会と称し、講習会などの形で行われた。ちなみに既婚者女性の組織は、婦人会と呼ばれました。	大正13年 (1924)	2600300109

番号	資料名	内容等	年代	資料ID等
2-11	【戦前期社会教育関係資料】 処女会設置ノ必要	この時期、女子青年団の必要性が特に叫ばれたのは、大正12年の関東大震災の影響が大きかったようです。川村山北では、処女会設置の必要性について、震災被害を第一に挙げて説明しています。これは婦人の死者が家庭内の生活を悪化させることから生活改善策として、また婦人の失業者（夫を失った女性）の経済的独立の対策として、女子青年団にその知識や技術習得が求められたようです。	大正13年 (1924)	2600300115
2-12	【相模国愛甲郡上荻野村岸家文書】改訂新定女子読本 巻一	高等女学校本科1年生の教科書。高等女学校入学にあたっての心得に始まり、ドイツ、イギリスの貴婦人の性質や、手紙の書き方など様々なトピックが記述されています。	大正4年 (1915)	岸家文書 2199434817
2-13	【相模国愛甲郡上荻野村岸家文書】女子植物教科書	高等女学校本科1年生が使用した教科書。植物の形態だけでなく、有毒・薬用植物といった、生活上有用な知識を学んでいました。	大正4年 (1915)	岸家文書 2199434847
2-14	【相模国愛甲郡上荻野村岸家文書】GIRLS'NEW LANGUAGE READERS BOOK ONE	高等女学校本科1年生の英語教科書。女子生徒用の教科書なので、内容も女性を中心にした教材となっています。	大正6年 (1917)	岸家文書 2199434765
2-15	【相模国愛甲郡上荻野村岸家文書】GIRLS'NEW LANGUAGE READERS BOOK TWO	高等女学校本科2年生の英語教科書	大正6年 (1917)	岸家文書 2199434764
2-16	【相模国愛甲郡上荻野村岸家文書】女子用日本史教科書 巻上	高等女学校本科2年生の科書。古代～平安時代までが3篇に分けて記述されています。このうち第1篇は、ほぼ記紀神話の話となっています。	大正5年 (1916)	岸家文書 2199434782
2-17	【相模国愛甲郡上荻野村岸家文書】高等女学校用物理教科書	高等女学校本科4年生の教科書	大正3年 (1914)	岸家文書 2199434846

### 第3章 戦時での女子教育の変化

3-1	創立25周年（神奈川県立横須賀高等女学校）	女学校には同窓会のほか、今のPTAに該当する組織もつくられました。県立横須賀高等女学校では、保護者と本校職員からなる「家庭会」が組織され、生徒の学習に必要な物品・日用品を会費で購入していました。	昭和6年 (1931)	K372-3-1-19
3-2	昭和7年11月通常県会議案原稿	県立女子師範学校の予算要求書には、昭和8年度旅費に「卒業生ノ指導出張」とあります。教育現場に出ている同校卒業生の指導にもあたっていることがわかります。	昭和7年 (1932)	県会1932-3
3-3	昭和12年度全国公立中学校・高等女学校・実科高等女学校経費に関する調査	文部省がまとめた全国公立学校中学・高等女学校の調査書。当時県内の女学校は県立7校、市立3校、町村組合立4校の計14校が所在、就学率は総定数の9割ほどでした。	昭和12年 (1937)	G37-119-37
3-4	松の操 第24号別冊	鎌倉高等女学校OB会「尚綱会」が発行した冊子。「事変記念日奉仕作業」という項目に、学校の貯金箱に積み立て、そこから友達と雑貨屋や菓子屋などで慰問品を購入、手作りの慰問袋に慰問文とともに詰め込んだとあります。	昭和14年 (1939)	K374-4-1
3-5	学校時報第24巻第2号（神奈川県立高等女学校）	神奈川県立高等女学校(私立)では、毎年恒例の展覧会が実施され、当初の展覧会名は「家事展覧会」で、数年前から「時局と生活の展覧会」に変わったそうです。	昭和15年 (1940)	K374-1-114
3-6	通常県会議案原稿	昭和17年度新規事業として「理科充実費」の予算案が提出されました。これは「国防の充実、産業進展の基礎をなす理科教育の重要性」が認識され、「女子教育においても緊要なり」とされていました。	昭和16年 (1941)	県会1941-4
3-7	大磯女学校調査事項	同校の教育状況を調査したもので、第3項目に科学教育振興の状況が記されます。理科との緊密な連携、科学思想増進等の他、特に「防空・防毒に関する科学的知識」は、男手不在の家庭内で、女性が重要視されたためでしょう。	昭和17年 (1942)	R4-312-01
3-8	昭和16年 昭和17年3月6日県参事会議案原稿	戦時体制が整ってくると、女子教育にも変化があらわれます。生産分野における人材養成のため、私立の女子青年学校が登場します。昭和16年刊『神奈川県私立青年学校協会要覧』によれば、当時県内には4校が所在しました。	昭和16年 (1941)	県会1941-14

番号	資料名	内容等	年代	資料ID等
3-9	昭和18年11月通常県会議案原稿（経済部3ノ2）	神奈川県蚕業試験場は、「女子および養蚕実行組合指導員を目指す男子に対する蚕絲に関する学理及び技術の講習」のため、「国民学校高等科卒業者もしくは同等以上の学力ある者」を募りました。	昭和18年 (1943)	県会1943-4
3-10	鎌高のあゆみ50年-激動の昭和とともに-	昭和18年、女子学徒動員が決定されます。市立鎌倉女子高等女学校では、翌年に女学生らが「(株)日本製鋼所横浜製作所」といった工場や、海軍経理部に動員され、国民総動員体制のもと、女学生も戦時下の労働力とされていきました。	昭和53年 (1978)	K372-4-11

## 第4章 男女共学化の時代へ

4-1	昭和20～23年度 連合軍関係書類	藤沢市立藤沢高等女学校で収受・作成された連合軍司令部等の指令綴りです。教育関係の指令約90件が時系列的に綴られており、様々な通知が矢継ぎ早に発出されていたことが読み取れます。なお、本資料は紙質が粗悪で劣化が著しいことから、原則として原資料は閲覧に供さず、複製物（デジタル画像）で御利用いただいています。	昭和20年 (1945)	1199618431
4-2	昭和22年度 高等学校昇格に関して（大磯高等女学校）	本資料は近年大磯高校から引き渡された歴史的公文書で、新制高等学校への昇格に係る文書が収録されています。昭和23年に新制高等学校が実施となり、大磯高等女学校の新制移行の許可申請書に、創立22年、卒業生は千数百名、在校生は全員進学を希望していること、本校の実績や女子進学校を目指すことなどが記されています。	昭和22年 (1947)	1202291674
4-3	創立40周年記念誌（神奈川県立横須賀高等女学校）	県立横須賀高等女学校教員の渡邊章浩氏が寄せた一文「戦後雑感」には、戦後の新しい時代に向けた教育観が打ち出されています。概略すれば、「民主的・日本建設で重要なのは女子教育問題で、この機会均等なくして民主国家建設はあり得ない、男女対等・均等の教育制度の確立が第一義」と述べています。	昭和22年 (1947)	3199354756
4-4	【葛野重雄氏旧蔵資料】 新制高等学校実施の手引	現在の高等学校は昭和23年4月に「新制高等学校」として誕生しました。本資料は文部省学校教育局が「その実施準備の万全を期するため」作成した手引きです。男女共学については、「必ずしも男女共学でなくてもよい」が、教育の機会は男女均等に与えられるべきという原則が掲げられていました。	昭和22年 (1947)	2202004213
4-5	神奈川県立大磯女子高等学校 第三学年時間割表	県立大磯女子高等学校（現：県立大磯高等学校）第3学年の時間割表です。「被服」や「食物」といった家庭科系の科目や「華道」や「書道」といった芸術科系の科目が多く並んでいることが見て取れます。 （当館所蔵歴史的公文書「学校一覧表」より作成）	昭和23年 (1948) ごろ	1202291668
4-6	昭和25、26年度 高等学校設置（市町立高校移管関係書類）	新制高等学校の発足間もない段階では、市町立の学校が多くありました。昭和25年頃には、これらの市町立高等学校が、学区制の適正実施等の観点から、県に移管されることとなり、次々と県立高校に衣替えしていきました。	昭和25年 (1950)	1199604430
4-7	神奈川県立西湘高等学校 創立10周年記念誌	県立西湘高校（小田原市）は戦後の新設高校ですが、女子のみ的高校として昭和32年に開校します。女子校として開校したのは、近隣女子高校の募集停止・定員減等への配慮からでした。同校が「女子高校」であったのはわずか3年で、4期生からは男子が入学し、以後共学校となっています。	昭和42年 (1967)	3200900653
4-8	【広報課撮影写真】 県立西湘高校、建物全景	周囲を田畑に囲まれ、富士山をバックにそびえ立つ新築の西湘高校の校舎を写した写真です。開校当初は小田原市立海狗中学校内の仮校舎で授業が行われていましたが、昭和33年3月3日の桃の節句の日に新校舎に移転します。昭和35年11月には一連の校舎建設がひと段落し、翌昭和36年1月に落成式が行われました。この写真はその頃撮影されたものです。	昭和36年 (1961)	4199205093
4-9	昭和37年度 学区制関係綴（4冊の1）	県立高校の共学化をめぐる動向には、学区制が大きな影響を与えていました。昭和37年に県教育委員会が設置した学区制対策委員会では、男女共学に関する協議が度重なり行われています。	昭和37年 (1962)	1199604492

番号	資料名	内容等	年代	資料ID等
4-10	【広報課撮影写真】県立立野高校の教室スナップ	横浜立野高校は旧横浜第二高等女学校にルーツを有する県立高校です。横浜市内は1校1学区の小学区制が採られたことにより、新制高校実施時から共学となりました。	昭和36年 (1961)	4199205096
4-11	【広報課撮影写真】平沼高校	明治33年創立の旧県立高等女学校を前身とする横浜平沼高校の授業風景等の写真です。撮影時期は不明ですが、昭和30年代のものと推定されます。	年不詳	4199400039
4-12	昭和54年度 県立大秦野高校の男女共学化についての学校内検討状況について	昭和56年3月まで女子のみが在籍する高校であった県立大秦野高校(現:秦野総合高校)の共学化に係る同校内での検討状況について、同校校長から県教育委員会に報告した資料です。本資料には校内アンケートの結果等が綴られており、学校側は教職員のコンセンサスも得られたとして、昭和56年度からの共学化実施を求めています。	昭和55年 (1980)	1200455717
4-13	昭和56年度 県立女子単独高校男女共学化調査検討について(中間まとめ)	県教育委員会では県立の「女子高校」の男女共学化問題について、昭和54年度から検討を開始していました。本資料はその中間まとめの報告書です。当時7校あった「女子高校」には、男女共学への移行を強く望む学校もある一方で、「女子高校」として存続していこうとする学校もありました。	昭和56年 (1981)	1200455718
4-14	昭和57年度 陳情(8月)	昭和57(1982)年に県教育委員会が受けた、神奈川県立上溝高等学校の男女共学化の推進とそれに伴う施設設備の改善に係る陳情に関する文書です。PTAや職員組合、同窓会といった様々な団体が連名で同校の共学化を求めています。県教委は、同校がかつて共学化しつつも再び女子校化した歴史等を踏まえ、陳情内容を重く受け止めつつも「十分慎重な配慮をしなければならない」と、この時点では熟慮する姿勢を示しています。	昭和57年 (1982)	1200467285
4-15	昭和60年度 藤沢高等学校	平成22年度をもって完校(※)し、藤沢清流高校に再編・統合した最後の県立「女子高校」、藤沢高校の監査に関する公文書です。本資料の生徒一覧表欄には、表中に男子の項目はありませんが、女子生徒のみが在籍していたことがわかります。 ※学校としての教育活動の完了を意味する造語で、閉校・廃校の語の代わりに用いられます。	昭和60年 (1985)	1200483755
4-16	【CD-ROM】校歌/神奈川県立藤沢高等学校	当館では紙媒体の文書だけでなく、写真やCDなど様々な媒体の資料を所蔵しており、閲覧室で視聴することができます。ちなみに、藤沢高校の校歌の作曲者は、童謡「赤とんぼ」や「この道」などで有名な山田耕筰(1886-1965年)です。	平成18年 (2006)	3200904041
4-17	新校設置計画/平成20年	平成22年4月、藤沢高校は大清水高校と再編・統合し、旧大清水高校の校舎を活用する形で、藤沢清流高校として装い新たに開校します。この再編・統合により、藤沢高校の約85年の歴史に幕が下ろされました。	平成20年 (2008)	3200606787
4-18	神奈川新聞記事「さよなら 学びや 旧藤沢高校 2月末、85年の歴史に幕」(平成23年2月3日)	再編・統合後、校舎が活用されない藤沢高校は閉鎖され、跡地の利活用が模索されることとなりました。藤沢高校は平成17(2005)年に3名の男子が入学するまで、県立最後の「女子高校」としてその歩みを進めてきました。なお、旧藤沢高校跡地は現在、住宅街に様変わりしています。	平成23年 (2011)	8500011103

## 第5章 それぞれの良妻賢母教育考

5-1	(5-1~5-3 学校の場合) 保土ヶ谷町地内民有地を県立高等女学校敷地に編入訓令の件 (「自明治33年至明治34年地理回議録」から)	明治33(1900)年、神奈川県高等女学校(現在の横浜平沼高等学校)が設置されます。設立地や予算等をめぐって紆余曲折があり、最終的に選ばれた地は橋樹郡保土ヶ谷町岡野新田(当時の私有地でした。地主であった岡野氏は「教育のためなら」と快諾したといえます。橋樹郡役所あてに出されたこの訓令は、当時の神奈川県知事周布公平名義により、同年に県有地として編入したことを示すものです。	明治33年 (1900)	1199400134
-----	--	---	-----------------	------------

番号	資料名	内容等	年代	資料ID等
5-2	花たちばな 第1号	この資料は、県立高等女学校が創立10年を目前にして発行した、学友会と同窓会との共同会報の創刊号です。卒業生会員の文書通信や学校の現況、在校生の消息等を共有する目的でした。この創刊号には、当時の神奈川県知事が卒業生に向けた告辞を掲載しており、女子の高等教育とはすなわち「良妻賢母」であると3度に渡り繰り返されています。また、この学校の卒業生であることは、良妻賢母の証とされたといえます。会の特別会員による講話「女子の本領」でも、男女の性質の違いから女性が家庭を守る正当性が語られています。	明治43年 (1910)	3200906276
5-3	大正12年 営繕管財課第5号 県立高等女学校図面	神奈川県高等女学校は、開校式から2日後に神奈川県立高等女学校と改称しました。大正12(1923)年の関東大震災後、昭和3年の学校再建の工事報告書には「外観は虚飾を廃し、簡素端麗にして気品を有する」と記されたとのこと。完成当時の校長は「名実ともに本校が県下女子教育の中心となり得る基礎を得たもの」と語り、建物からして良妻賢母の精神を体現させています。この図面では「割烹(調理)室」「アイロン室」「洗濯室」等、家事に必要な教室を分けているのがわかります。当時の教育課程では、裁縫や家事に多くの時間があてられたといえます。	大正12年 (1923)	1199411502
5-4	(5-4~5-6 世間の場合) 『食道楽 続編春の巻』 (村井弦齋肖像写真)	村井弦齋は現在の愛知県豊橋市出身で、明治37(1904)年に平塚市に移り住みました。博学でアメリカ留学を経たのち、報知新聞社で働くかわら多くの小説を執筆しました。中でも『食道楽』は空前のベストセラーとなり、中流以上の家庭では備えがないのを恥じ、娘の嫁入り道具には必ず入っていたといえます。弦齋は小説内で「衛生上から割り出した配合で、人の身体の栄養となるよう研究された調理法は西洋料理である」とし、家庭でできる圧倒的な量の西洋料理レシピを衛生面、栄養面、健康面等、様々な角度から解説をしながら盛り込みました。	明治39年 (1906)	3199356519
5-5	『食道楽 夏の巻』より 「女子教育」	「女子教育」の項では、お登和の兄である中川が、女らしさとはなにか、女子の教育はどうあるべきかを料理にたとえた表現で妹を諭します。当時は学校も世間も女性の在り方を同じように求めていたことがわかります。しかし、『食道楽 秋の巻』の「家庭の教育」の項では、ただ学校に通わせておけばよいという風潮に反論し、家庭の改良の必要性を主張しています。弦齋は「徳育、智育、体育の根源は食物であって身体や精神の発達には食育が先」とし、学校における女子教育の見直しを迫っています。料理の授業は裁縫等に比べ位置付けが明確でなく、取り入れる学校は少なかったといえます。	明治36年 (1903)	3199356518
5-6	新聞集成明治編年史 第11巻	『二十世紀の予言』は、明治34(1901)年1月2日及び3日の報知新聞に掲載されたものですが、これは弦齋の考案という説があります。19世紀は「婦人の時代」だったと結論付けていますが、100年後の未来に対し現在のような教育体制や女性の社会進出を弦齋はどう思うのでしょうか。22番目の予言について、現在に至っても幼稚園は廃止されてはませんが、男女問わずの学歴社会到来は予測どおりだったといえます。	昭和40年 (1965)	3199506063

## 女学校のこぼれ話 ①

当女学校の裁縫の授業では、衣類だけでなく、多様なデザインの手工芸品製作も学んでいました。それらのデザインは、家族に対する人びとの祈りや思いが込められた、意味のあるものです。ここではいくつかの例をあげて、それぞれのデザインの意味について紹介します。

## 女学校のこぼれ話 ②

当館では、昭和24(1949)年、神奈川県初の女性指導主事となった、松本喜美子氏資料を所蔵していますが、松本氏が女学生時代に使用していた大学ノート用紙は、当時高級だったフルス紙でした。このコーナーではそのフルス紙の透かし模様(ウォーターマーク)について紹介します。